東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

さまよえる『仮面舞踏会』：歌劇『仮面舞踏会』の場面設定を巡って

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-12-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/917

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

さまよえる『仮面舞踏会』
――歌劇『仮面舞踏会』の場面設定を巡って――

本 間 晴 樹

Ⅰ．はじめに

ジュセッペ・ヴェルディ[1]の歌劇『仮面舞踏会 Un Ballo in Maschera』が、1792年に起こったスウェーデン国王グスタヴ3世[2]の殺害事件を素材にしていることは、よく知られている。しかしその初演に際し、主に官憲による検閲の圧力のため、舞台の設定が17世紀のボストンに変更されたのも周知のことである。

この事件のオペラ化を最初に実現したのはフランソワ・オーベール[3]で、脚本はユージェーヌ・スクリーブ[4]によっているが、そこでは事実通りのスウェーデンが舞台とされていた。その後、ヴェルディが手掛けるまでの間に、多くの作曲家がこの素材を手掛けたが、彼等は様々に異なる場所を、物語の舞台として選んできた。ヴェルディの作品が、ほぼこの題材によるオペラの決定版として定着して後にも、特にスウェーデンにおいては、その場面はなおもあちらこちらを移動し続けている。すなわち、20世紀になってから、ヴェルディの作品を、場面設定をボストンからストックホルムへと移して（戻して）上演する演出が増えたが、少なくともスウェーデンでは、それが聴衆の皆を満足させるには至っていないのである。

このようなことになったのは、何よりも、このオペラの状況設定とストーリー展開が、スウェーデン人一般の抱いている歴史像と余りにずれていて、強い違和感を生じさせているからである。もとより、歌劇の脚本が史実に忠実である必要はないし、作品内部での整合性が保たれていれば、見て聴いて楽しみ、感動を覚えるのに差し支えはないはずである。しかし、スウェーデン国民が等しく共有してきた歴史認識からすれば、純然たる政治的事件である仮面舞踏会での国王殺害事件が、男女の恋愛沙汰、それも、女性が苦手で同性愛者との噂の高かったグスタヴ3世の引き起こした三角関係によっておこった、というのは、無視してオペラを楽しむには

1　Giuseppe Verdi 1813-1901. 以下、音楽史上の人物に関するデータは、主として *Die Musik in Geschichte und Gegenwart, der 2. Auflage.* Kassel und Stuttgart 1994-2008. による。
2　Gustav III. 1746-1792. 以下、スウェーデン史上の人物に関するデータは、*Svenskt biografiskt lexicon.* Stockholm 1962-2008. による。
3　Daniel François Esprit Auber 1782-18.
4　Eugène Scribe 1791-1861.

余りに大きな障害となっているのである。

勿論、違和感が強すぎて鑑賞の妨げになるなら、鑑賞しないという選択もある。しかし、もともとヴェルディはスウェーデンでも人気の高い作曲家であり、また『仮面舞踏会』の音楽は、鑑賞を放棄するには余りに素晴らしすぎるものであった。それにこのようなかたちであれ、スウェーデンのある面が表現されているということも、スウェーデン人にとって無視し去るのを難しくする要因であった。その結果が、オペラと史実との整合性を探り出すための様々な努力となったのである。

それとは別に、仮面舞踏会事件あるいはグスタヴ３世の生涯を、文芸化・舞台化あるいは音楽化しようとする試みは、19 世紀以来行われてきたし、現在でも続けられている。それほどのことを、芸術に携わる多くの人々にさせてきたのは、事件そのものやグスタヴ３世の魅力と共に、ヴェルディの作品の偉大さにもよるのであろう。

本稿では、まず前提としてグスタヴ３世殺害事件の史実としての経過を紹介した後、ヴェルディに至るまでのこの事件のオペラ化の過程、そして主にスウェーデンを中心とした、その受容とそれに基づいたその後の芸術活動について解明し、歌劇『仮面舞踏会』を生み出したものとそれがもたらしたものについて考察することにしたい。

Ⅱ．仮面舞踏会事件の実際

グスタヴ３世殺害事件については、以前にも拙稿で取り上げたことがあるが[5]、ここでは専らオペラ『仮面舞踏会』に係わりのある事柄に絞って、改めて論じてみる。

5　本稿の作成に際しては、前回の論文を書いて以来新たに出版された、あるいは新たに見出された資料・文献を多数利用したが、前回使用した文献類も依然として有用であり、参考になった。ここでは、前回すでに紹介したものも含めて、係わりのある文献・論文などを一律に列挙しておく。ただし、インターネット上で見出されたサイトの記事については、註の関係項目に掲げることにする（排列は著者の姓のアルファベット順および五十音順）。

Folke Almén *Gustav III och hans rådgivare 1772-1789.* Uppsala 1940
John Brown *The Northern Courts.* London 1818
Ernst Brunner *Anckarström och kungmordet.* Falun 2010
Julian Budden *The Opera of Verdi.* London 1978
Ingrid Czaika *Gustav III und Verdis Maskenball.* Wien 2008
Lars Ericson *Mordet på Gustav III.* Lund 2005
Vincent Godfroy *The dramatic genius of Verdi.* London 1975
Beth Henning（１）*Gustav III.* Stockholm 1967
〃　（２）*Ögonvittnen om Gustav III.* Stockholm 1960
Alf Henriksson（１）*Ekot av ett skott.* Häganäs 1986
〃　（２）*Kungliga teatern.* Stockholm 1994
Olle Holmberg *Leopold och Gustav III.* Stockholm 1954
Karin Johansson *Olycks maskeraden.* Stockholm 1926
Stig Jägerskiöld “Tyrannmord och motståndsrätt.” *Scandia.* 1962
Bertil & Staffan Lagerström *Kungen är skjuten!* Stockholm 1993

すでに指摘したとおり、この事件は純然たる政治的理由によるものであり、恋愛沙汰を含めた私的な要因は、ほとんど問題にならないと言って良い。そしてその政治的な理由といえば、グスタヴが憲法を無視し、議会を強要して実行した抑圧政治と戦争政策にあった。

しばしば見かける単純な叙述としては、グスタヴの進めた進歩的な改革政策が、古い特権に固執する貴族勢力の反感を買い、その結果彼は殺された、というようなものがある。グスタヴが色々な改革を行ったのは事実だが、基本的に貴族主義で貴族趣味であった彼は、最晩年に追いつめられるまで、貴族制度の根幹に係わるような政策はとっていない。それに彼の改革に対する反発は、市民や農民の間にも生まれていた。また暗殺者達（ほぼ全員貴族）の政治的目標は結構多様に分かれていたが、貴族特権の回復や強化などを謳った者はいない[6]。

また、よく見かける記述として、グスタヴが言論・出版の自由を確立した、というようなものもあるが、スウェーデン憲法の一角をなす出版自由法は、1766 年、即ちグスタヴの即位の５年前に、メッサ党政権によって制定されたものである。政権掌握後のグスタヴは一応これを引き継いだが、1774 年の改定の際に、この法を憲法から外してしまっている。そして 1780 年以降の彼の政策は、専ら出版の自由の骨抜きと罰則の強化であり、公平に見て彼は言論の自由の弾圧者の側に属するだろう。

私生活に関して言えば、グスタヴが同性愛者であるというのは、広く伝えられた、しかし確証のない風説ではあるが、彼が容姿の優れた青年を多く側近に集めていたのは事実である。一方女性関係については、王太子時代に愛人として噂された人々が何人かいるが、さして深い関係ではなかったというのが通説である[7]。むしろ、女性との交際が苦手で、性行為には全く不器用で、王妃との同衾にも介添役が必要だったことなどが伝えられている。このことは、彼の

Leif Landen *Gustaf III : en biograf.* Stoccckholm 2004
Georg Landsberg *Gustav III inför eftervärlden.* Stockholm 1968
Pierre de Lus *Gustav III I ett porträtt.* Stockholm 1947 Stockholm 1947
Erik Lönnroth *Den stora rollen.* Uppsala 1986
Operan 200 år. red. av Klas Ralf, lund 1973
Elmer Nyman *Indragningsmakt och tryckfrihet.* Stockholm 1963
Christopher O'regan *Ett märkvärdigt barn.* Stockholm 2007
Birgit Pauls *Giuseppe Verdi und das Risorgimento.* Berlin 1996
Stig Ramel *Gustaf Mauritz Armfeldt.* Stockholm 1997
Gardar Sahlberg（１）*Den aristokratiska ligan.* Stockholm 1967
〃　（２）*Mera makt åt kungen.* Stockholm 1976Stockholm 1976
Allan Sandström *Officerna som fick nog.* Örebro 1996
Christian Springer *Verdi und die Interpreten seiner Zeit.* Wien 2000
Nils Staf *Polisväsendet I Stockholm 1776-1850.* Stockholm 1950
August Strindberg *Kristina/Gustav III.* Stockholm 1988
Matteo Summa *Bravo Mercadante : La regioni di ungenio.* Brindisi 1995
Alma Söderhjelm *Gustaf III : s syskon.* Stockholm 1945
浅井香織『音楽の現代が始まった時』中公新書　1989
岡田暁生『オペラの運命』中公新書　2001
本間晴樹「スウェーデン国王グスタフ３世の統治と芸術活動」『東京音楽大学研究紀要第 23 集』1999

6　cf. Jägerskiöld, pp.136-141, Henriksson, pp.90-96.

7　cf. Henning (1), pp.85-88, pp.115-118.

長男グスタヴ・アドルフ[8]の出生について、危険な噂を生み出すもとにもなった。

殺害犯ヨハン・ヤコブ・アンカルストレーム[9]は、もとより彼の友人でも秘書でもない。軍人の子として生まれ、自身も少年時代に近衛将校となり、宮廷で小姓の任務にも就いたことから、グスタヴと面識があった可能性はあるが、真相はわからない[10]。事件の10年前には、彼は大尉の位で軍を離れ、農業経営に従事し、遅くとも1789年までには、彼はグスタヴの絶対王政の明瞭な反対者になっていた。彼の妻グスタヴィアナとグスタヴ3世の間には、全く接触の痕跡はない[11]。

占い師ウルリカ・アルヴィドソン[12]は、当時のストックホルムの有名人であり、トランプ占いとコーヒー占いを得意とし、宮廷人や王族までも顧客に持っていた。グスタヴ自身も占ってもらい、身の危険を告げられたと言われているが、これは多分に風説に属する。彼女の占いがよく当たったのは、実は彼女が宮廷・政界・社交界の大物たちを顧客としていたので、託宣を告げる一方で、彼等から多量の情報を引き出すことができたからだと言われている。

問題の仮面舞踏会は、宮廷行事ではなく、オペラ座の主催する一般向けのものであり、入場券を買えば誰でも参加できる性質の催しであった[13]。勿論オペラ座自体が国王直属の施設なので、その開催は国王の意向によっていた。

仮面舞踏会がスウェーデンで始まったのは、17世紀のクリスティナ女王[14]の治世、宮廷行事としてとされているが、18世紀になると劇場を会場として、多くの参加者を集めて開かれるようになっていった。18世紀末には、貴族も市民も集まる、冬の社交シーズンの人気行事であったらしい[15]。ただ、1792年について言えば、１月26日から２月24日にかけて、イェヴレで議会が開かれたため、国王も宮廷人も社交人士も皆イェヴレに行っていたので、この間はオペラ座の舞踏会は開かれなかった。議会の閉会後、３月２日の金曜日に久しぶりのオペラ座の仮面舞踏会がひらかれ、実はアンカルストレームはこの夜暗殺を実行するつもりで参加して

8　Gustav IV Adolf　1778-1837.　国王グスタヴ４世として1792年即位、1796年親政開始、1809年革命により廃位。以後国外に去り、スイスで客死。

9　Johan Jakob Anckarström 1762-1792.

10　Brunnerは、宮廷に仕えていた当時のアンカルストレームを、グスタヴが記憶していたという仮定で叙述を進めている。一方Landenは、彼が小姓だったことを否定する立場をとっている。それぞれ根拠は不明である。

11　彼女の名前はグスタヴィアナ・エリサベート・アンカルストレーム（Gustaviana Elisabeth Anckarström, 旧姓レーヴェンLöwen 1764-1844）。1783年ヨハン・ヤコブと結婚、２男２女を儲ける。夫の刑死後、義弟等と共にレーヴェンストレーム（Löwenström）と改姓。1797年判事バルトルド・ルンドベルィ（Barthold Rundberg）と再婚し、ゴットランド島に移り住むが、バルトルドは1803年に横死。1815以後はストックホルムに住み、家族・親族達の世話を受けつつ、金銭の貸し付けも営み、生活を立てた。
http://goto.glocalnet.net/jonasn/ant_bb/p94c8cfd8.hmtl 2010/03/29

12　Urlica Arvfedson 1734-1801.

13　Sahlberg (1) の p.85 に、13日付で、仮面舞踏会開催を告げる新聞広告が引用されている。但し、入場料の価格は不明である。因みに、少し前（1785年）のカールスクローナにおける仮面舞踏会の入場料は、16シリング（1/3リクスダレル）であった。cf. .Lars Lagerqvist *Vad kostade det?* Lund 2011, p.132

14　Kristina 1626-1689.　女王として在位は1632-1654.

15　グスタヴ3世殺害事件の後、仮面舞踏会は久しく開かれなくなり、1806年にはオペラ座自体が閉鎖されてしまった。オペラ公演は1812年に再開されたが、仮面舞踏会の再開は1821年のことである。その後19世紀を通じ、仮面舞踏会はオペラ座でさかんに開催されている。cf. *Operan 200 år.* p.35,pp.41-42.

いるが、参加者が少なすぎて人混みを利用するのが困難とみて、中止している。翌週９日は大寒波のため、催しは中止となり、次の３月 16 日の、恐らくこのシーズン最後の仮面舞踏会において、ついに殺害計画が実行されたのであった。

後に検閲において問題視された、暗殺者を決めるための籤引きは、スクリーブによる創作である。実際には、アンカルストレームの実行の意志が極めて固く、他の者にその役が回る余地はほとんどなかった。それに目的は国王殺害だけでなく、その場の混乱に乗じて市民を、できれば軍を動かし、体制転覆にまで持っていくのが本来の計画であったから、他の者の役割も軽いものではなかった。

当日の夜、グスタヴのもとに届けられた、暗殺計画を知らせる匿名の手紙は、計画参加者の妻によってではなく、反絶対王政主義者として計画に加わってはいたが、殺害という手段に反対していた、C・リリエホルン[16]中佐の手で書かれたものであった。グスタヴがこれを無視して、舞踏会へ出かけて行ったのは、オペラの通りである。その夜 11 時 40 分頃、アンカルストレームは会場となっていたオペラ座の舞台の上で、背後の至近距離からグスタヴをピストルで狙撃した。重傷は負ったが即死には至らなかったグスタヴは、側近のハンス・フォン・エッセン[17]に介助されて素早く別室へ退き、同時に会場の扉を全部閉めさせて出入りを止めたので、混乱に乗じて街へ出て、市民や兵士を巻き込んで政変を起こすという、陰謀者たちの計画は発端で挫折した。間もなく現場に駆け付けた警視総監リリエンスパレ[18]は、まずその場の全員に仮面を外させ、数時間かけてすべての来場者の名前と住所を記録し、同時に現場に捨ててあったピストル２丁とナイフを調べ、市内の銃砲店に聞き込みをしてその所有者を割り出し、17 日のうちにアンカルストレームを、数日のうちに他の主だった者達を逮捕した。

アンカルストレームは警察で、行動の目的、事前の準備から当日の経過に至るまでを、事細かに供述した。共犯者についても、彼らがすでに逮捕されていたためもあり、包まず隠さず述べているが、実行が自分の意志によるものだということは、あくまで主張した[19]。

グスタヴは重傷の身で半月持ちこたえたが、３月 29 日に没した。一時は助かるという希望も生まれたため、治療に当たっていた医師の一人が、故意に悪化させたという噂も流れたが、根拠のない風説である[20]。彼が犯人たちへの寛大な措置を望んだのは、オペラにある通りだが、結局アンカルストレームだけは３回の公開笞刑の後、４月 27 日に斬首刑に処せられた。彼の兄弟と妻子は、以後アンカルストレームの姓を憚り、レーヴェンストレームと改姓した（レー

16　Carl Pontus Lilljehorn 1758-1820.

17　Hans Henrik von Essen 1755-1824.　1811 年元帥。

18　Nils Henrik Aschan Sivers 1738-1814.　1776 年初代のストックホルム警視総監に就任。1786 年貴族に叙せられてから Liljensparre。1792 年夏以後ストックホルム副総督。

19　永竹由幸氏の『ヴェルディのオペラ　全作品の魅力をさぐる』（音楽の友社　2002）には、「犯人が黙秘したため理由は明らかではないが」（237 頁）と記されている。しかしアンカルストレームが事件について、詳細に告白したのは明らかで、２万数千語に及ぶその告白は、既に John Brown の著書に掲載されているし、その後の Hentiksson (1) や Brunner の著作にも全文引用されているのである。

20　Lagerström, p.67

ヴェンは夫人の旧姓)。スウェーデンの貴族名簿には、アンカルストレームの姓がレーヴェンストレームに変更されただけで、この一族はそのまま留められている。

他には、ホルン[21]、リビング[22]、リリエホルン、エーレンスヴェルド[23]の４名が死刑判決を受けたが、国外追放に変更されている。彼らはそのまま帰国を許されることなく、他国でそれぞれの人生を送っている。このうちリビングは、フランスに移ってルーヴァンを名乗り、1843年まで生きている。彼の息子は、アレクサンドル・デュマ（大）の親しい友人である。

Ⅲ．事件の記録と文学

グスタヴ３世の生涯および治世、彼の殺害事情について述べた研究文献・概説書の類は、19世紀初め以来夥しい数が出版されていて、とてもここでは紹介しきれないので、詳細は註（５）に掲げたレイフ・ランデン Leif Landen の著書の文献解題と、アルフ・ヘンリクソン Alf Henriksson、エーリク・レンロート Erik Lönnroth 等の著書の文献目録を参照されたい。ここでは、後に行われるこの事件の文芸化・舞台化に係わりのある範囲だけを取り上げる。

仮面舞踏会での国王殺害は、非常にセンセーショナルな事件であったから、直ちに国の内外において、しばしば銅版画の挿絵入りの文書によって広く伝えられた。しかし、その後のヨーロッパ情勢の急展開の為もあり、この事件に関する著作が出るまでには、なお時間を要した。最も早い例としては、ドイツ人M・アルント[24]（彼はポンメルン人なので、1814年まではスウェーデン国民であった）の著した、『グスタヴ３世および４世時代のスウェーデン』（1818）が挙げられる。同じ年、イギリスで出版されたジョン・ブラウン[25]著の『北欧の宮廷』も、この事件を扱っている。スウェーデン国内では、Ｍ・Ｊ・クリュセンストルペ[26]による『近代史の内幕についての叙述』（1834）が、グスタヴ３世を取り上げたものとしては早く、次いでグスタヴの同時代人の手記として、N・ダールベルィ[27]の『国王グスダヴ３世の最後の日々』（1842）、E・シュレーデルヘイム[28]の『国王グスタヴ３世の歴史に関する覚え書』（1851）などが、共に筆者の死後に公刊された。1840年代以後になると、言論・出版の自由化、歴史学の発達とともに、

21　Claes Fredrik Horn 1763-1823.
22　Adolf Ludvig Ribbing 1765-1843.
23　Carl Fredrik Ehrensvärd 1767-1815.
24　Ernst Moritz Arndt 1769-1860.
25　John Brown ？-1826.　彼の生涯については不明な点が多く、知られているのは18世紀末から19世紀初めにかけて、ヨーロッパ大陸を広く旅行し、各国の宮廷や国際政治に関する本を多数表していること、ミュール紡績機の発明者サムエル・クロンプトンの権利を擁護する活動を行っていること、詳細は不明だが、1826年ロンドンで自殺したこと等である。cf. *Dictionary of National Biography (DNB)* Oxford University Press 1885-.Second edition, vol.3, p.76
26　Magnus Jakob Crusenstolpe 1795-1865.
27　Nils Dalberg 1736-1820.
28　Elis Schröderheim 1747-1795.

すでに過去に遠ざかったグスタヴ３世時代についての研究・著作がさかんになり、Ｅ・イェイエル[29]、Ａ・フリュクセル[30]といった第一級の歴史学者による著作にも、取り上げられるようになっていった。ただ、19 世紀中に現れた著述においては、グスタヴ３世に対する評価は様々に分かれていても、アンカルストレームについては、ブラウンの著作など少数を除くと、凶暴かつ偏狭な人間として、否定的にまた一面的に描かれるのが常であった。

この事件を素材にした文学作品としては、Ｊ・Ｌ・アルムクヴィスト[31]の『王妃の宝冠 *Drottningens Jubelsmycke*』（1834）が、かなり早い時期の、しかも大きな影響力を持ったものである。この小説ではグスタヴ３世は脇役だが、反王政的なアルムクヴィストは、グスタヴの息子の出生に関するスキャンダルを、事実として扱っている。アヴ・クルベルィ[32]の『グスタヴ３世とその宮廷』（1838 ～ 39）は、小説仕立てではあるが、資料を駆使したセミ・ドキュメントでもある。

20 世紀に入ると、まずＡ・ストリンドベルィ[33]による戯曲『グスタヴ３世 *Gustav III*』が現れる。以前から急進主義者として、国王の専制を批判的に取り上げてきたストリンドベルィは、この作品でもグスタヴに対して容赦がない。しかしこの劇は殺害の３年前、すなわち 1789 年の、グスタヴとアンカルストレームの接触で終わっている。ストリンドベルィにはいつものことだが、保守的な論壇の攻撃にさらされたこの作品は、彼の没後の 1916 年１月まで上演できなかったが、初演で大成功をおさめ、以来劇場のレパートリーに定着している。

1910 年には、ソフィー・エルカン[34]作の小説『アンカルストレーム *Anckarström*』が世に出る。暗殺者の側に視点をおいたこの作品は、広範な資料の援用により、事件への新しい見方を打ち出すことになった。Ｎ・ロードストレーム[35]は、1991 年に一少年の目から見たこの事件の物語を、『砂時計をさかさまに *Vänd ditt timglas*』として著した。他に、ドキュメント小説としてこの事件を扱ったものとしては、Ｅ・ブルンネル[36]が近年（2010）『アンカルストレームと国王殺害 *Anckarström och kungamordet*』を発表している。

Ⅳ．歌劇化の始まりと展開

この事件が初めて舞台作品として上演されたのは、オーベールの『ギュスターヴ３世　また

29　Erik Gustaf Geijer 1783-1847.
30　Anders Fryxell 1795-1881.
31　Carl Jonas Love Almqvist 1793-1866.
32　Karl af Kullberg 1813-1857.
33　August Strindberg 1849-1912.
34　Sophie Elkan 1853-1921.
35　Niklas Rådström 1953- 現存。
36　Ernst Brunner 1950- 現存。

は仮面の復讐 Gustave III ou le Bal masqué』で、1833 年パリオペラ座での初演であった。前述のとおり脚本はＥ･スクリーブが書いたものであり、彼の脚本は、そののちの多くの後続作者、最終的にはヴェルディに脚本を提供したアントニオ･ソンマ[37] にまで、影響を及ぼすことになった。すなわち事件の背景として、政治抜きの恋愛沙汰、グスタヴとアンカルストレームの三角関係、ウルリカの占いや決行前の籤引きに至るまで、スクリーブが生み出したといってほぼ間違いない[38]。スクリーブがこの事件について、どこから情報を得たのかについては、確実なことは不明だが、おそらく前述したイギリス人ジョン・ブラウンの著作（英語）からと推測されている。ちなみにブラウンの著書は、当時としては叙述が公正で、考察の行き届いた良著である。

それはともかく、ナポレオン統治下の 1806 年以来フランスの劇場およびそこでの演目は、内務大臣による厳重な監督と検閲体制の下に置かれていた[39]。にも関わらず、このオペラが支障なく上演されたのは、ヴェルディの場合と比べて注目に値する。このオペラは初演以来好評で続演を続けたが、1835 年初め国王ルイ・フィリップを狙った爆殺未遂事件が起きたため、しばらくは上演を止められてしまった。しかし間もなく再演が可能になり、1830 年代から 40 年代にかけて、ヒットを続けた。

オーベールの作品の成功は、同じ題材による類似作をその後次々に生み出すことになった。しかし、スウェーデンの歴史や人物に対する関心はその動機にはなく、史実との整合性は更に無視され、ただ仮面舞踏会の最中の暗殺、という異様なプロットが何通りにも再生産されていくことになった。

1841 年、ヴィンチェンツォ・ガブッシ[40] がヴェネツィアで発表した『クレメンツァ・ディ・ヴァロイス Clemenza di Valois』は、場面を 13 世紀の南フランスに設定し、アルル伯爵ジュリオが、十字軍戦士レナートの妻クレメンツァとの関係を疑われ、レナートに殺害されるという筋で、殺害現場としての仮面舞踏会の他、占いや絞首台の下での出会いなど、オーベールの作の特徴をほぼ継承していた。脚本を書いたのは『シャモニーのリンダ』『タンクレディ』などの作者ガエタノ・ロッシ[41] で、時代と場所を極端に変えたのは、恐らく検閲（当時ヴェネツィアはオーストリア領）を意識してのことであった。この作品は、これの初演を目指してロッシーニが久しぶりにヴェネツィアを訪れた、というエピソードを残したまま、続演の機会もなく忘れ去られてしまった。

37　Antonio Somma 1809-1864.

38　1993 年にパリのアリオン Arion 社から出された歌劇『ギュスターヴ 3 世』（オーベール作）のＣＤの解説には、このオペラの初演時にパリにいてこれを見たアンカルストレーム未亡人が、オペラの中のアメリアの扱いについて激しく抗議した、との記述があり（18 頁）、Czaika の著書にも同様の記述がある。しかし両者ともその根拠を示していない。註（11）に書いたとおり、ストックホルムにおいてそれなりに安定した生活を送っていた、既に 69 歳になる彼女が、何のためにパリにいたのだろうか。スウェーデン語の資料による限り、彼女がパリであれどこであれ、外国に行ったという記録は全く見出されない。cf. Henriksson (1) pp.198-207.

39　cf. 浅井香織、77-78 頁

40　Vincenzo Gabussi 1800-1846.

41　Gaetano Rossi 1774-1855.

1843 年には、サルヴァドーレ・カマラーノ[42] の脚本により、サヴェリオ・メルカダンテ[43] 作曲の『イル・レジェンテ（摂政）Il Reggente』が、トリノのレッジオ劇場において初演された。これも、三角関係、仮面舞踏会での惨劇を含め、先行作の諸要素は引き継いでいたが、場面は16 世紀のスコットランドとされ、実際の暗殺事件が踏まえられていた。すなわち、メアリ・ステュアート女王の廃位後、スコットランド王位についた幼いジェームス 6 世（後にイングランド王ジェームス 1 世）の下で政権を握っていたメアリの異母兄モレー伯爵ジェームス[44] が、1570 年 1 月 23 日に射殺された事件である。しかし、実際にはモレー伯は白昼リンリスゴーの町を通行中に、路傍の家屋から狙撃されたのであり、犯人のジェームス・ハミルトン[45] はメアリ・ステュアートの支持者であった。この劇中では、ハミルトン夫人のアメリアは、モレーを愛していながら、彼が戦死したとの虚報に惑わされ、ハミルトンと結婚したことになっている。これは、メルカダンテの創作力の絶頂期の作品としてかなりの人気を博し、ヴェルディの作が世に出て後も、1870 年代までは各地でレパートリーに留まっていた。

他にも、バレエ劇『スウェーデン王グスタヴォ 3 世 Gustavo III di Svecia』の台本をアウグスト・フスという人物が書き、1846 年ミラノのスカラ座に提出しているが、恐らく検閲に阻まれ、全く日の目を見なかった。

また、ヴィンチェンツォ・ベッリーニはオーベールの『ギュスターヴ 3 世』を見て創作意欲を刺激され、主人公が殺されない結末の『仮面舞踏会』を構想したといわれるが、彼の若死にはその実現を不可能にしてしまった[46]。

V．ヴェルディの挑戦と挫折

ヴェルディがいつからこの素材に心を惹かれるようになったのか、詳しいことはわからないが、さほど早い時期ではなかったらしい。そのきっかけの一つと思われるのは、1853 年『椿姫』の初演のためヴェネツィアを訪れた時、脚本家ソンマの知遇を得たこと、もう一つは、1856 年ナポリのサンカルロ劇場の支配人トレッリ[47] との間に、自作オペラ上演の約束を交わしたことであった。

ヴェルディがこの時点で、ナポリに提供するつもりだったのは、恐らく若い頃から意欲を燃やしていた、シェークスピアの『リア王』のオペラ化であった。ソンマとは、すでに 53 年以来『リア王』について意見を述べ合っている。

---

42 Salvadore Camarano 1801-1852.
43 Saverio Mercadante 1795-1870.
44 James Stuart, earl of Moray 1531-1570.
45 James Hamilton of Bothwelllaugh and Woodhouselee ? -1581. 亡命先のフランスで没。
46 cf. Budden, p.365
47 Vincenzo Torelli 1807-1882.

トレッリとの正式契約が成立したのは、1857年2月であった。しかしこの頃までに、『リア王』が早急には完成しないのではないかという危惧をヴェルディは抱き始めていた。若い頃から素材としてヴェルディを魅了し、彼を悩ませてもきた『リア王』は、結局完成しない運命にあるのだが、57年春、ヴェルディは『リア王』に代わる案として『レニャーノの戦い』もしくは『シモン・ボッカネグラ』を提案している。しかしナポリ側は、やはり新作の初演を強く希望した。この過程でヴェルディはオーベールの『ギュスターヴ3世』に関心を寄せるようになったらしい。やがて、これ以上題材を選り好みしている時間的余裕がなくなってきたことから、ヴェルディもソンマもトレッリも、仮面舞踏会事件の再オペラ化に向かって、足並みを揃えることになる。

ソンマは、ヴェルディの注文を取り入れながら、スクリーブの原作から新しい脚本を作る作業に取りかかった。当座の案ではタイトルは『仮面の復讐 Una Vendetta in Domino』、スクリーブからの変更点としては、アンカルストレームの名がカルロ、リビングとホルンがイワンとマゼッパに変えられるはずであった。一方トレッリからは、検閲を考慮して場所と時代を変えたほうが良いとの忠告が寄せられていた。しかし、ヴェルディはあまり真剣に考えなかったらしく、ソンマにもこの警告は十分に伝わらなかった模様である。ヴェルディと検閲との係わりでは、ヴィクトル・ユーゴー作の、フランス王フランソワ1世を描いた『王様はお楽しみ』のオペラ化がヴェネツィアで許されず、場所はマントヴァに、タイトルは『リゴレット』に変更を余儀なくされたのは周知のことだが（1851）、ナポリにおいても、『マクベス』を上演する際、殺害されるのをダンカン王ではなく将軍ヴァルブルゴ（ウォーバーグ）に変えさせられる（1849）という経験があったにも拘わらずである。

いずれにせよ、11月に提出された脚本の荒筋に対し、当局が返してきた指示は、予想外に厄介なものであった。それは（1）犠牲者が国王あるいは公爵では不可、（2）呪術が信じられていた時代までさかのぼらせる、（3）場所をスウェーデンおよびノルウェーにするのは不可、（4）主人公の愛は高貴に、控えめに描く、（5）殺害の理由は相続あるいは財産上のことに、（6）舞踏会は時代の習俗に一致させる、（7）銃器の使用は不可、といった内容であった。実際の事件を想起させる要素を、極力減らそうとしていたのが窺える。（2）と（6）はどうとでも解釈できそうだが、それだけにどうとでもクレームの理由になりそうな項目であった。

これにはソンマは驚き、怒りも表したが、それでも作品の完成を優先して、路線の変更をヴェルディに提案している。まずソンマが考えたのは、タイトルを『エルマンノ（ヘルマン）公爵 Il Duca Ermanno』とし、場所を12世紀のポメラニア（ポンメルン）公国にする、というものであった。ヴェルディはポンメルンには賛成したが、時代はもっと新しく、17世紀にするよう対案を出した（現実のポンメルン公国は1641年に消滅している）。仮面や踊りはいつの時代にもあったが、社交行事としての仮面舞踏会は、近世以後でなければ想定しにくいからであろう。

1858年1月14日、ヴェルディは『シチリアの晩祷』上演のため、ナポリに乗り込んだ。またしてもタイトルは『バティルダ・ディ・テュレンナ』と変えさせられたが、上演は大成功を

収め、その後彼はポンメルン路線での脚本の許可を取るため、当局との交渉に入ろうとした。ところが、彼がナポリ入りしたのと同じ日、パリではイタリア人フェリチェ・オルシニ[48]が、ナポレオン３世皇帝を暗殺しようとして、オペラ座前で爆弾を投じ、失敗に終わるという事件が起こっていた。このニュースがナポリに伝わると、検閲側の態度は一気に硬化し、情勢は致命的に悪化してしまった。やがて当局が改めて出した要求は、（１）犠牲者は君主でも元首でもない人物に、（２）ヒロインは殺害者の妻ではなく姉妹に、（３）時代は占いが信じられていた当時に（４）舞踏は省略、（５）殺害場面は観客に見えないように、（６）籤引きシーンはカット、というように、もはやドラマ性を消し去るのが目的としか思えない内容であった。史実にはなかった籤引きは、なくても済むようにも見えるが、アンカルストレームの陰謀への加担を急な変心の結果として描く限りは、暗殺者達の心の動きの描写のためにこれは欠かせないものであった。まして舞踏のシーンは、楽しい社交の場を一転して惨劇の場に変える為にも、なくてはドラマが成り立たなくなる性質のものであった[49]。

ヴェルディもソンマも、受けたショックは大きかったが、とにかく原案に沿った作品の検閲通過を目指し、協議を続けていた。ところがトレッリは、この間にソンマを差し置いて別の作者[50]に脚本を作らせ、２月にそれをヴェルディに提示した。これは、舞台を 14 世紀のフィレンツェに変え、犠牲者をグェルフィ党（教皇党）の指導者アルマンド、殺害者をその友人のロベルト・ディ・アディマーリ、その妻をアデリアとし、タイトルも『アデリア・デイ・アディマーリ Adelia degli Adimari』とする、というものであった。

この案をヴェルディは、ほとんど一顧もせずに拒否し、対してサンカルロ劇場は、彼を契約不履行の廉で告訴し、５万ドゥカートの賠償金を請求するに至った。ヴェルディも即座に劇場を告訴して対抗し、一時はナポリでのオペラ公演自体が破綻するかと思われた。この件は結局、ヴェルディが 58 年秋のシーズンのために別のオペラを提供する、ということで折り合いがつき、告訴は両方から取り下げられた。ここでヴェルディは、再び『リア王』に戻ることも考えたらしいが、所詮は間に合わないと諦め、最終的には『シモン・ボッカネグラ』のナポリ初演が、解決策ということになった。サンカルロ劇場には、新作でない点がなお不本意であったようだが、『シモン・ボッカネグラ』はナポリでは大好評で、客の入りもよかったので、このトラブルは跡を引きずらないで済んだ[51]。

48　Felice Orsini 1819-1858.

49　この時は情勢の急展開のため、３人の検閲官の意見が一致に至らず、結局警察長官が単独で条件を纏め上げたと言われている。cf. Budden, pp.367-368.

50　ドメニコ･ボロニェーゼ（Domenico Bolognese 1819-1881）の可能性が大きいとされているが、確証はない。cf. Budden p.370, Pauls p.227.

51　この当時、ナポリ音楽院の校長としてナポリ楽壇に大きな力を持っていたメルカダンテは、『イル･レジェンテ』の競合作品が世に出るのを嫌って、ヴェルディの仕事を激しく妨害したと言われている。cf. Godfroy, p.48

Ⅵ. 歌劇『仮面舞踏会』の出現とその後

ナポリとの問題は片付いたが、ヴェルディは一旦手を染めた『仮面の復讐』の構想を簡単に捨てる気はなくなっていた。上演場所としては、比較的検閲が緩いと思われるミラノ（当時オーストリア支配下）がまず考慮されたが、ヴェルディが結局、ナポリに劣らず検閲の厳しそうなローマを選んだのは、旧友であるアポロ劇場のヤコヴァッチ等の助力をあてにしてであり、また、ナポリに対する面当ての場所としては、ローマが最も適当と思われたからであった。また、スクリーブの『ギュスターヴ３世』がローマにおいて、オペラではなく台詞劇として上演されたという情報も入っていた。

それでもローマの検閲に対する配慮は怠らず、舞台は元々の 18 世紀のスウェーデンにするにしても、主役（犠牲者）をゴーテンブルク（イェテボルィ）伯爵とし、場所もストックホルムではなくイェテボルィに移すという案を、４月までに立ててソンマに知らせた。ソンマは、ミラノ初演を望んでいただけに甚だ不満であったが、ローマの官憲が概して好意的だという感触を得たことから、彼もローマ初演に向けて、一致協力することになる。

しかしナポリでの経験から、検閲による頓挫の可能性は真剣に考慮され、７月に至ってヴェルディは 17 世紀の北米、最終的にはボストンを提案することになる。イギリスからの植民者の拠点として、1630 年頃建設されたボストンの町は、17 世紀を通して恐らく人口１万に満たず、何よりも禁欲的な清教徒（ピューリタン）達が造った町として、およそ仮面舞踏会などには縁が遠かったはずであった。また、殺害されることになる主役は、マサチューセッツ総督ウォリック伯爵リカルド（リチャード）とされたが、元より架空の人物である[52]。また殺害の武器は、ピストルではなくナイフに変えられた。

アメリカで検閲を通らなかった場合は、カフカズ地方に移すことも考えたとされているが、具体的な構想の中身は多くは知られていない。いずれにせよ、８月以降はヴェルディもソンマも、ボストン路線に集中して仕事を進め、タイトルは『仮面舞踏会』と決められた。

1859 年２月、ローマのアポロ劇場で行われた歌劇『仮面舞踏会』の初演は大成功を収め、61 年にはフランス、イギリス、アメリカでも相次いで上演された。特にアメリカでは、南北戦争直前の緊迫した状況下に、まずニューヨーク、続いてボストンで上演され、大好評を博した。以来この作品は多くの国で、ヴェルディのオペラの中でも人気を誇るレパートリーとして定着する。

当時、イタリアを巡る政治情勢は急展開していた。1859 年４～７月の第二次解放戦争の結果、

52　17 世紀のアメリカに係わったウォリック伯爵には、ロバート・リッチ（1587-1658）とロバート・ダッドリー（1574-1649）がいるが、ダッドリーが関係したのは専ら中南米であり、どちらも暗殺されてはいない。シェークスピアのファンであるヴェルディは、むしろバラ戦争当時の梟雄ウォリック伯爵リチャード・ネヴィル（?-1471）を想起したのかもしれない。cf. *DNB First edition,* vol.16, pp.122-125, vol.48, pp.128-133.

オーストリアは中部ロンバルディアを放棄することになった。60 年 11 月までにナポリ王国は事実上解体し、61 年 3 月には統一の成ったイタリア王国が発足する。新国家にも検閲制度は残ったとはいえ、かなり緩いものとなり、かつ世界的名士となったヴェルディを悩ますことは、余りなくなった。この後ヴェルディは、以前に意に反する形での発表を余儀なくされていた諸作品、すなわち『マクベス』『スティッフェリオ』『シモン・ボッカネグラ』などを、本来の意図通りの姿に戻す作業を、鋭意進めていくことになる。しかし『仮面舞踏会』については、初めのアイデアの通りに直す、特に場所をストックホルムに戻す試みを、彼はしていない。初演で発表されたいわゆるボストン版は、一応彼の意を満たすものだったと思われる。さしずめ障害がなくなった後も、『リゴレット』の舞台をマントヴァからパリに戻す努力をしなかったように。

ただ、検閲とは別に、興行サイドの都合により、変更が加えられることはその後もあった。特に『仮面舞踏会』の場合には、場面設定を変えられることが多かったが、それにはヴェルディは特に異議を挟んだ様子はない。61 年のパリオペラ座での初演の際は、場所はフィレンツェとなっていた。同じパリのイタリア劇場での上演の際はナポリに変えられている。ロンドンのコヴェント・ガーデン劇場での初演においても、やはりナポリになっていた。『仮面舞踏会』の場面設定は、早くも不安定になっていたのである。

Ⅶ. スウェーデンの舞台化とスウェーデンでの舞台化

『仮面舞踏会』の場所をストックホルムに戻すことを、ヴェルディは特に望んでいなかったし、手掛けてもいない。それを最初に試みたのは誰か、いつのことか定かではないが、実際に舞台に乗せられたものとしては、1935 年コペンハーゲンのオペラ座で上演されたのが、最も早い例と思われる。ここではリカルドはグスタヴ 3 世に、レナートはアンカルストレームに、サムエルとトムはリビングとホルンに変わっていた。この公演は、特に評判になることも、その後の模範とされることもなかったようである。

場所をストックホルムに、時代を 1792 年に据えた、いわゆるストックホルム版が注目を浴び、広く普及するに至ったのは、1952 年、ロンドンのコヴェント・ガーデン劇場での上演からであった。エドワード・デント[53] が翻訳というより改作した脚本で、かつ英訳歌詞で演じられたこの公演は、この歌劇の本来の姿への関心を呼び起こし、以来他の人々によってもストックホルム版の脚本作りが試みられるようになった。前述のように、現代では場面をストックホルムに定めての上演は多い。しかし、ストックホルム版が最も正統的な版として、定着した訳でもない。

元々ストックホルム版への試みは、オペラの筋を実際の歴史に近づけようとしてなされたのではない。あくまでヴェルディの本来の創作意図を、再現しようとして行われたことである。

53　Edward Joseph Dent 1876-1957.

そして地名や人名を本来のものに戻せば、歴史的事実とオペラとのずれが、一層あらわになってしまう。特にスウェーデン人にとっては、前述した違和感を大きくするだけなのである。

遡ると、ヴェルディの音楽に対する人気は、スウェーデンでは早くから広がっていた。彼のオペラがスウェーデンで初めて、コンサートではなく舞台公演として取り上げられたのは、1848年のストックホルムオペラ座での『エルナニ』の上演であった。この公演は、当時来訪していたイタリアの歌劇団によるものであった。後に、この歌劇団が長期間オペラ座の舞台を独占したことに対し、スウェーデン人の歌手たちが抗議を発し、オペラ座監督のフーゴ・ハミルトン伯爵[54]が辞任に追い込まれるという副産物はあったが、ヴェルディへの高い評価は早くも確立した。続いて52年には『マクベス』（スウェーデン語訳）が、60年には『イル・トロヴァトーレ』が初演され、共に大ヒットとなった。61年の『リゴレット』は、滑り出しはあまり快調ではなかったが、やがてこれも人気作の列に入った。その後も68年の『椿姫』、80年の『アイーダ』、90年の『オテッロ』、96年の『ファルスタッフ』と、ヴェルディの晩年の諸作品は、世界初演後数年のうちにスウェーデンでも初演へと持ち込まれ、絶賛を浴びて、レパートリーに定着している[55]。

それなのに、『仮面舞踏会』の初演はヴェルディの生前には実現せず、その後も遅れに遅れ、ようやく1927年に実現した。勿論その内容については、オペラファンの間では既によく知られていたから、さほどのインパクトはなかったし、別に悪評も立たなかったが、大好評ともいかなかったのは、すでに述べてきたことから理解できると思われる。しかし、ヴェルディの音楽の素晴らしさは、改めて印象付けられることになった。スウェーデン人にとってこの作品は、ストーリーに違和感があるからと言って、捨て去ることのできないものになったのである。

脚本にストックホルム版を用いることが、スウェーデン人にとって違和感の解消にならないのは既述の通りだが、それでも1952年のデント版の出現は、スウェーデンでも注目を浴び、この作品への新たな取り組みを誘い出すことになった。50年代半ば、オペラ評論家で翻訳家のエーリク・リンデグレン[56]は、オペラ座の依頼により、デント版を下敷きに、新しいストックホルム版の創出に取りかかった。最も重要な変更は、グスタヴ3世とアンカルストレーム夫妻の間に私的な接触がなかった事実に沿わせるため、新たにホルベルィ伯爵 Greve Holberg という架空の人物を作り出し、その妻アメリアへのグスタヴの思慕を設定し、暗殺者の役をホルベルィに移したことであった。必然的にアンカルストレームは脇役の一人となり、従来のストックホルム版でのホルンの役割をアンカルストレームが、リビングの役をホルンが務めることになった。また、スクリーブ以来ウルリカの追放を進言するのは、「法相」アルムフェルト[57]の

54　Hugo Adolph Hamilton 1802-1871.

55　以上はすべて、ストックホルムオペラ座での上演の記録である。cf. *Operan 200år.* pp.225-228.

56　Johan Erik Lindegren 1910-1968.

57　Gustaf Mauritz Armfeldt 1757-1814. グスタヴ3世の寵臣。グスタヴの下では陸軍中将、オペラ座監督。グスタヴの没後失脚し、1794年死刑判決を受け国外に亡命。1799年名誉を回復され軍・宮廷に復帰。1811年再び失脚しフィンランドに退去。ロシア皇帝に寵愛され、フィンランドの要職を歴任。

役となっていたが、グスタヴの寵臣ではあるが遊蕩者で、「法相」に相当する地位についたこともないアルムフェルトではふさわしくないので、ストックホルム主教が行うことにした。殺害の武器も、史実通りにナイフからピストルに戻された。また、オーベールの『ギュスターヴ３世』以来、小姓のオスカル（メゾソプラノ）はすべての系列作において（ガブッシの『クレメンツァ』ではフェランテ）、この深刻なオペラに華やかさと軽妙さを与える役として、不可欠となっていたが、リンデグレン版ではオットーの名で、一層グスタヴに寵愛され、馴れ親しんだ存在として描かれることになった。有名なグスタヴの同性愛趣味をほのめかし、歴史的通念との矛盾を減らすためであったが、これは却って、殺害の動機としての男女関係の重大さを、損ねることになってしまった。また殺害場面では、ピストルを構えながら射撃をためらうホルベルィに、アンカルストレームが手を添えて引き金を引かせるという演出にしたが、これも夫としての怒りの印象を、薄める結果にしかならなかった。

1958 年リンデグレン版の『仮面舞踏会』がオペラ座で上演されると、スウェーデン語の歌詞を用いた甲斐があって、興行成績はよく、劇評も概して肯定的であったが、結果としては、ヴェルディの作品を実際の歴史に近づけることの、限界が示されたことになった。どのみち、ヴェルディを含む 19 世紀ロマン派の作曲家や脚本家は、検閲側の意向の如何に拘わらず、殺人事件の理由としては政治よりは恋愛を選んだに違いないし、史上の人物の同性愛趣味になど、一顧もしなかっただろう。

スウェーデンのヴェルディ音楽のファンが、歴史的常識とのずれに悩ませられずに『仮面舞踏会』を楽しむために、生み出した方法の一つは、この作品をむしろグスタヴ３世とも彼の殺害事件とも切り離してしまうことであった。1991 年スウェーデン北部のウメオにあるノルランド・オペラ劇場[58] で上演された『仮面舞踏会』は、音楽はすべてヴェルディの曲のままだが、脚本家Ｌ・マルムベルィの手により、場面設定は 19 世紀初頭のジェノヴァに変えられていた。すなわちナポレオン戦争の終結後、新設されたジェノヴァ公国（実際にはジェノヴァは 1815 年サルデーニャ王国に併合されている）の君主である公爵リカルドが、コルシカ生まれの廷臣である伯爵レナートに、妻の不倫の相手と疑われて、仮面舞踏会の最中に殺されるという筋である。架空の国まで作り上げて案出したこの改作は、さほど評判にもならず、続演された様子もない。

2006 年２月には、南部マルメのオペラ座[59] で、ペーテル・オスカルソン[60] の手による新版が上演された。これも音楽はすべてヴェルディのままで、場面設定は現代のどことも特定されない国となり、その国の首相が、友人である顧問官の手により、妻と密通したという嫌疑のため、仮面舞踏会の最中に殺害されるというストーリーである。小姓のオスカルはオットーという名

58　Norrlandsoperan. 1974 年開場。
59　Malmö Opera, 以前は Malmö stadsteater または Malmö opera och musikteater。1944 年開場。
60　Peter Oskarson 1951- 現存。

で、学生運動家として登場する。かなり露骨に、パルメ[61]首相殺害事件を連想させる物語である。しかしここでは、占い師も仮面舞踏会も、時代錯誤という他はない。劇評もあまり芳しくなかった様子である[62]。

スウェーデン史との辻褄合わせを放棄しつつ、より尤もらしい作品世界を作り出そうとする努力は、実は他でも行われている。詳細は不明だが、20 世紀の後半イギリスのサリー州のセミプロ歌劇団が、場面設定を 18 世紀中頃のニューオーリーンズとした『仮面舞踏会』を演じたと言われている。17 世紀のボストンよりは、社交や舞踏会の似合う環境が選ばれたということなのだろう。また、1980 年にニューヨークで上演された例では、ボストンとは言え 18 世紀後半の、独立戦争直前のかなり大都市となったボストンを舞台に選んでいる。

以上とは別に、ヴェルディ没後 200 周年を機に、ナポリで発見された検閲以前の『仮面の復讐』の最初の原稿を元に、ヴエルディの音楽を整合させたいわばオリジナルの『仮面舞踏会』が、2002 年マルメのオペラ座で、2003 年ストックホルムの民衆歌劇場で、上演されている。再演の話は聞かれないが、いずれにせよ、スウェーデン人だけでなく多くの国の人々に、ここまで努力させるだけの魅力を、ヴェルディの音楽は持っているのである。

Ⅷ. ヴェルディを超える、あるいは避ける試み

オーベール、ヴェルディを初めとする他国の芸術家たちが、グスタヴ 3 世を舞台上で盛んに表現している一方で、スウェーデン人自身はこうした試みに容易には加われなかった。国王を主役ないし重要な役に据えたオペラは、18 世紀以来いくつも作られていたが、テーマが国王殺害となると、ことは重大になる。出版自由法に基づき、1810 年以来スウェーデンでは検閲制度は表向き廃止されていたが、国王に関する言説だけは特別扱いで、19 世紀中頃までは厳しい取り締まりが行われていたのである。

文芸作品については前に触れたので、舞台化・映像化・音楽化の領域でのグスタヴ 3 世を辿ってみると、やはりストリンドベルィの戯曲『グスタヴ 3 世』が、最も早い時期のものとして注目に値する。彼の他の作品と同じく、国王に対する敬意の欠如を保守的な人々に攻撃されながら、これを舞台で演じた劇は初演（1916）から大きな人気を維持している。しかし、ストリンドベルィの作品がオペラ化・バレエ化された例は結構あるのに、これはそういう扱いを受けていない[63]。やはり仮面舞踏会の 3 年前で終わらせているのが、印象として弱いのだろうか。

61　Olof Palme 1927-1986. 1969-74 年および 1982-1986 年スウェーデン首相。1986 年 2 月 28 日殺害され、真相は今なお不明。

62　cf, http://www.mansonskultur.se/operarecensioner/maskeradbalen.htm　2008/11/20

63　オペラ化されたのが確かな作品には、『令嬢ジュリー Fröken Julie』『無垢の花嫁 Kronobruden』『夢の戯れ Drömspel』がある。

やはり前に紹介したアルムクヴィストの『王妃の宝冠』は、小説として世に出たものである。これが、『ティントマラ Tintomara』のタイトルで、ラーシュ・ヴェルレ[64] によって作曲され、オペラとしてストックホルムオペラ座で初演されたのは1973年のことであった。主人公のティントマラはグスタヴ３世の寵臣Ａ・Ｆ・ムンク伯爵[65] と女優との間の子で、男女の性別を超越した異常な美しさと妖しさを備えている（オペラではこの役はメゾソプラノで歌われる）。当時広く流布していたスキャンダル、即ちグスタヴ３世の長子とされているグスタヴ・アドルフ王子（後の国王グスタヴ４世）の実際の父親はムンクであるという風説を、アルムクヴィストは採用しているので、ティントマラはグスタヴ・アドルフ王子の姉ということになり、当人もそのつもりで王子に接している。ティントマラを巡る多数の男女の愛憎劇と、ティントマラが母のために盗み出した宝冠、グスタヴ３世の殺害などが交錯し、ティントマラの処刑という結末へ進む。これは相当インパクトのある作品として迎えられ、劇評でもかなり好意的に取り上げられたが、その後の再演は容易にはいかない様子である。

1986年には、テレビドラマ『反逆 Sammansvärjningen』が、１時間ずつ全３回のシリーズで放映された。これは、仮面舞踏会事件を主にリビングやホルンの立場から描いたものだが、添えられた音楽は何故か、専らＪ・Ｃ・グルック作の曲の綴り合せであった。

2008-2009年のシーズンのストックホルムオペラ座では、バレエ劇の『グスタヴ３世 Gustav III』が披露された。フランス人パトリス・バール[66] の振付によるこのバレエは、グスタヴによるオペラ座建設から家庭内のトラブル、特に母との不和、側近達の暗躍を経て、仮面舞踏会での殺害、最後に妻と息子による回想、という展開で、彼の生涯を辿っている。しかしこれに充てられた音楽は、Ｃ・Ｍ・フォン・ウェーバーの『魔弾の射手』『オベロン』『オイリアンテ』および交響曲とピアノソナタ、それにＪ・Ｍ・クラウス[67] の葬送カンタータ、交響曲ハ長調等からの抜粋の継ぎはぎである。

更に2011年ロック・ミュージシャンのステファン・アンデション[68] が、コンセプトアルバム『劇場王 Teaterkungen』をプレスしたことを加えておく。これは、グスタヴの生涯を王子時代からクーデター、対ロシア戦争、反対派との抗争、そして暗殺に至るまで13の歌で描き、ギターとピアノにオーケストラの伴奏つきで、録音したものである。前掲のバレエと同じく、ここでもグスタヴの、外面の華やかさと内面の孤独さのギャップが、鋭く描き出されている。

以上の他にもスウェーデンでは、史的事件や国王を取り上げた映画が、無声映画時代から数多く制作されていて、グスタヴ３世を扱った映画も存在するのは確かなのだが、今回はそこまで調べが行き届かなかったのと、映画史に残るような水準の作品はない様子なので、本稿では

64　Lars Johan Werle 1926-2001.
65　Adolf Fredrik Munck 1749-1831. グスタヴ３世の寵臣の代表。グスタヴの私生活に深く係わり、王妃の性行為の相手という噂が広く流れた。グスタヴの死後失脚し、以後はイタリアで暮らす。
66　Patrice Bart 1945- 現存。
67　Joseph Martin Kraus 1756-1792.　ドイツ生まれの作曲家。ストックホルムオペラ座の楽長在任中に没。
68　Stefan Andersson 1967- 現存。

その分野は省略する。

Ⅸ. 結び

すでに絶対王政も貴族政治も過去のものとなった現代、グスタヴ３世が、あるいはその死が、善悪是非の見地から論じられることはなくなった。現代人の心にグスタヴ３世が浮かぶとすれば、まずはオペラ座の創設者としてであろう。国民の教育の場という大義名分の下に建てられたオペラ座は、「王立歌劇場[69] Kungliga Operan」という正式名のとおり、多分にグスタヴ自身のための慰安と享楽のための場であり、当時は国王個人のための部屋が多数設けられていた。グスタヴは、よもやここが自分に死をもたらす場所になるとは思わなかっただろうが、後世ここの舞台で、自分のことが演じられる日が来ることを予想していただろうか。注目されるのが好きで絶えず人気を気にしていた彼としては、望み通りの結果が訪れたことになる。

スウェーデン人にとって、歴史上のグスタヴ３世は、舞台や映像などの芸術作品を通して接する上では、非常に魅力的な存在である。同時にそうした作品の一つとして、ヴェルディの音楽もきわめて魅力的である。そしてこの両者の間に、甚だ解決しにくい矛盾があることは、スウェーデン人の音楽ファンを悩ませてきた。しかし一方でそれが、新たな芸術的努力を導き出す原動力になってきたことは、これまで述べて来た通りである。幸いにも、その努力は今でも続けられている。上記の矛盾が解かれる日は、滅多にはやってこないだろうが、それまでは新たなグスタヴ３世像が生み出され、またヴェルディの『仮面舞踏会』の新たな鑑賞スタイルが作り出される状況が続くのであろう。見方にもよるだろうが、筆者には結構なことと思われる。

（本学教授＝歴史学担当）

69　1898 年以降の正式名称は「王立劇場 Kungliga teatern」である。